

いふに同じ。

〔於路加於比〕下小兒語

嬰兒の語に、父をと、と云はち、よりて、と轉りて、よりと、と轉りたるのみ、與羽の邊地には、だ、アともいふ歟、皆多行のタチツテトと轉り來なり、由は、いまの考へざる母をか、と云は、はか同韻の言の横通して轉せるなるべし、五十音圖にて、音の反切を見るに、父字は同行を縦に通ふも一奇といふべし、父は縦に轉り、母は横に

〔擲海一得〕上今小兒母ヲか、さまト云、是ハ家家ノ字ナリ、通鑑陳ノ宣帝紀ニ曰、北齊ノ後主、泣啓大后曰、侑緣復見家家無緣永別、胡三省注ニ、齊ノ諸王呼嫡母爲家家ト、イツノコロヨリ日本ニ言傳タルニヤ、子ガ母ヲか、ト呼ヨリ轉ジテ、父モ妻ヲか、と云、

〔伊呂波字類抄〕知人倫、嬬人呼母爲嬬母、

〔倭訓栞〕前編四十五おも 日本紀に母をよめり、古事記に御母とも見ゆ、チオモ、オオモ乳母湯湯母なども見えたり、今朝鮮語にも玄かいへり、一説には、梵語の阿摩也といへり、萬葉集に阿母と書り、史記の注に阿母は乳母と見えたり、よて萬葉集に乳母をもよめり、

〔古事記〕上故爾八十神怒、欲殺大穴牟遲神、共議而、中以火燒、似猪大石而轉落、爾追下、取時、即於其石所燒著而死、爾其祖御命、哭患而參上于天、請神產巢日之命時、乃遣蜺貝比賣與蛤貝比賣、令作活

略○中 蛤貝比賣持水而塗母、乳汁者、成麗壯夫、訓壯夫云、而出遊行、

〔古事記傳〕十塗母乳汁者、は於毛能知志流登奴禮婆と訓べし、略註 母は乳母を云なり、凡て於母

と云は、親母にまれ乳母にまれ、兒に乳を飲しむる人の稱なれば、親母とせむも違はず、親母を云も、乳をのまじ養ふことにつきての稱なり、然るをたゞ波々の古言とのみ心、されど中卷玉得て、乳養のことにあづからぬ處の母字をも、なべて於毛と訓はひがことなり、

垣宮段に、取御母とあるも、乳母なり、なほ於母のことは、彼處傳廿四に委く云べし、

オモ